

# 日英語の「場」志向性の違いについて

—日本のアニメのセリフとその英語翻訳を題材として—

山 田 昌 史

## 抄 録

本稿では、日本のアニメのセリフとその英語字幕を題材として、「場」の志向性を持つとされる日本語（井出（2020）、藤井（2020）等）が日本のアニメのセリフにどのように反映され、また、「外在的視点」から第三者的に事態を描写することを好む英語にどのように翻訳されているのか検討しながら、日英語の「場」の志向性の違いについて考察する。藤井（2020）によると、日本語は「自己と他者が場において共存しているという感覚のもとに、主客が明確に分かれることなく、自他融合的に共鳴・共振しながら進められ、創出される。自己は独立しているというより、場に埋め込まれているかのように場に存するすべてのものと関わり合いながら生かされている」（藤井（2020）：61）とされるが、このことが日本語のアニメ作品のセリフにどのように反映され、また、日本語と異なる言語志向性を持つ英語字幕にどのような特徴があるか、考察する。

キーワード：日英対照言語学、「場」の言語学、日本のアニメ、英語翻訳、事態把握

### 1. はじめに

日本語と英語の表現上の違いは、それぞれの言語が根ざす社会、文化、思考法といった観点からこれまで様々な研究がなされてきた。たとえば、人間の行動様式と両言語のタイポロジーの関係を指摘した池上（1981）の「スル的言語」と「ナル的言語」、日本人の文化的背景や思考法の違いから両言語の違いを捉えた牧野（1996）の「ウチ」と「ソト」、事態把握の観点から両言語を説明した池上（2011）の「主観的把握」と「客観的把握」、池上（2011）をさらに発展させた尾野（2018）の「体験的把握」と「分析的把握」、影山（2021）の「点」と「線」など、様々な観点から日本語と英語がそれぞれ根ざす言語の志向性についての言語分析が提案されてきた。特に、近年、池上の一連の研究（cf. 池上（2006）、（2011）等）を発展させ、言語使用や談話場面を分析対象に拡大して、学際的な視点から言語の指向性の根源を探る研究が登場している。このような立場の研究は「場所の言語学」（岡（2013）等）または「場の語用論」（cf. 井出（2020）、藤井（2020）他）と呼ばれるものである。本稿では、この哲学的な思考法と言語研究との接点をめぐる研究成果について言及しながら、日本のアニメのセ

リフとその英語字幕を分析対象として、言語表現が使われる「場」を志向する日本語とその志向性を持たない英語の違いを考察する。

本稿の構成は以下である。2節では、「場の語用論」について、議論の端緒であると思われる池上の一連の研究（2006、2011）を取り上げる。そして、池上の研究を発展させた「場」の言語学の枠組みから日英語の違いを探究する藤井（2020）を取り上げる。そして、主に藤井（2020）を参考に日本語のアニメ作品のセリフがどのように英訳されているのかを観察しながら、藤井（2020）の妥当性を検討する（第3節）。第4節で本稿をまとめ、今後の研究課題を述べる。

## 2. 先行研究

本節では、本研究で議論する「場」という哲学的概念を日本語の言語使用の中核に据えた、いわゆる「場の語用論」と呼ばれる枠組みについて先行研究を概観する。

日英語の違いと「場」の志向性については、池上（2006、2011等）の先行研究（「主体」と「客体」の関係性の日英対照研究（池上（2006））、「事態把握」の日英対照研究（池上（2011））」にその端緒がみられ、その研究対象を語用論のレベルに拡大し、話し手と「場」の関係を哲学的モデルに昇華させた井出（2020）、藤井（2020）へとその研究の広まりが見られる。井出は「場」の語用論を「話者は自己の内側に場の全体を映し、全体の中に位置づけた自己を自覚して話すという発話モデル（井出（2020）:6）」と定義づけている。つまり、発話がなされる場の中に話者自身と発話に関わるコンテキストや発話の状況といったものが不可分の状態で存在することを前提とする発話モデルであるとされる。本節では、まず、池上（2006）の「主体」と「客体」との関係性を日英語の違いとして捉える研究と認知言語学（cf. Langacker（1991）等）で提案された事態把握を言語のタイポロジーとして捉える池上（2011）の研究を概観し、さらに「場」の言語学のモデル（井出（2020））を基盤として日本語と英語の対照研究を行っている藤井（2020）について概観する。

池上（2006）は、日本語と英語の違いを「主客対立」と「主客合体」というふたつの対立概念の違いとして捉えている。(1)の例を観察する。

### (1) Where am I?

ここはどこ？（池上（2006）：183-184）

(1)では、自分自身が道に迷っているのであるが、日英語で表現の仕方が大きく異なっている。英語では、話し手である主体自身が迷っているにも関わらずそれがIと言語化されていることから、迷っている主体が自身から抜け出して他人のごとく自身を描いている。一方、日本語では、話し手で動作主体である私自身が言語化されておらず、道に迷った主体自身の視点から言語化されている。池上（2006:186-187）は、英語は「〈自己〉を〈他者〉化する話し手」（「主客対立」）を好み、日本語は「〈自己・中心的〉に事態を把握する話し手」（「主客合体」）を好むとそれぞれの言語の指向性につ

いて述べている。このように、日本語と英語には「主体」と「客体」の捉え方の違いが存在し、それが(1)のような言語表現の違いに関わっているとされる。

さらに池上(2011)では、認知言語学(cf. Langacker(1991))の事態把握で提案された2つの事態把握(「主観的把握」と「客観的把握」)を言語のタイポロジーとして捉え直し、その違いが日英語それぞれの言語志向性に大きく関わっていることを明らかにしている。

池上は、言語の運用と人間の認知を関連づけるには、「同じ〈事態〉について、いくつかの違った捉え方、そしてそれに基づいてのいくつかの違った言語化の仕方が可能な場合への注目も欠かせない。」(池上(2011):50)と述べている。そして、〈事態〉の捉え方には2つの類型、すなわち、「主観的把握」と「客観的把握」があると、それぞれを以下のように定義づけている。

〈主観的把握〉：話者は問題の事態の中に身を置き、その事態の当事者として体験的に事態を把握する－実際には問題の事態の中に身を置いていない場合であっても、話者は自らがその事態に臨場する当事者であるかのように体験的に事態を把握する。

〈客観的把握〉：話者は問題の事態の外にあって、傍観者ないしは観察者として客観的に事態把握する－実際には問題の事態の中に身を置いている場合であっても、話者は(自分の分身をその事態の中に残したまま)自らはその事態から抜け出し、事態の外から、傍観者ないし観察者として客観的に(自己の分身を含む)事態を把握する。

(池上(2011):52)

日本語は〈主観的把握〉を好む言語で、英語は〈客観的把握〉を好む言語であるとされる。このことは、以下の日本の小説の原文とその翻訳の違いから明らかとなる。

(2) a. 国境の長いトンネルを抜けると雪国であった。(川端康成『雪国』)

b. The train came out of the long tunnel into the snow country.

(E. Seidensticker 訳)

(池上(2011):55)

(2a)では、話し手である話者が移動する汽車の中におり、その話し手の視点から景色の移り変わりを体験的に描いている。一方、(2b)は、話し手は汽車の中におらず、汽車を外から俯瞰的に見ている視点をとっており、汽車がトンネルの中から外に出てくる事態として描かれている。このような表現差が生じるのは、日本語は「主体的把握」によって話し手の視点から事態が描かれているが、英語ではこのような事態把握は好んで用いられず、英語が好む「客観的把握」に適うように英訳されたため、表現上、大きな違いがあると分析されている。

藤井(2020)は、日本語のいくつかの言語表現や言語行動(言表主体の非明示、内在的視点、全体描写・状況描写)について分析しながら、日本語の「場」志向性について、「自己と他者が場において共存しているという感覚のもとに、主客が明確に分かれることなく、自他融合的に共鳴・共振しながら進められ、創出される。自己は独立しているというより、場に埋め込まれているかのように場に存するすべてのものと関わり合いながら生かされている」(藤井(2020):61)と述べている。その一方で、英語の話者の言語行為を「「個」を中心とし、一人が話し、一人が聞くという前提をもち、「個」が対峙する」(藤井(2020):61-62)と特徴づけ、日本語と異なる言語行為を志向することを明らかにしている。その結果、日本語では、池上(2006)が提示した(1)の例のような言表主体の明示性の違い、池上(2011)が提示した事態把握のタイプロジーに基づく事態の捉え方の違い(内在的視点、全体描写・状況描写)、さらに、日本語は述語性が強い言語であることを明らかにしている。

藤井(2020)は言表主体の明示化の違いが現れている例として以下を挙げている。

- (3) a. 昨日、公園で友達と会いました。  
       I met my friend in the park yesterday.  
       b. 気分がいいので今日は散歩にいきます。  
       Since I feel well, I will go for a walk today. (藤井(2020):65)

(3)の日本語の例では、発話者自身であり、事態の担い手である「私」が明示的に述べられていないが、その英訳では、「私」が言表されている。これは、上述の池上(2006)の述べる自己の他者化(客体化)を回避するという日本語の特徴と同じことである。一方、(3)の英訳にIという言表主体が存在することから、自己を客体化し、それを言語化することを志向する言語であることがみてとれる。

次に、内在的、外在的視点について、藤井は以下の例を挙げている。

- (4) a. 発車します。  
       b. The bus is in motion. (藤井(2020):69)

(4)は、バスがバス停から出発する際に表示される電光掲示板の日本語表示とそれに続いて流れる英語表示だと藤井は述べている。この日本語表示は、出発する主体である「バス」が表示されていない。この表現の話し手はバスの内部にいて、バスの動きに呼応する形でその状況を言語化した表現であり、内的表現である。その一方で、その英語表示では、動作主体である「バス」が客体化され、外的視点からバスの動きを俯瞰的に表現していると分析されている。

さらに、日本語は話し手を中心とした場面全体を包括的に描写する「全体描写」を好む一方で、英語は場面を外から描写する「状況描写」を好む傾向があるという。

- (5) a. 個人の別荘はそこここにくつつでも建てられていた。  
b. Many rich families had built their villas there. (藤井 (2020) : 73)

(5a) は、「話し手が自分も含めた場面、まわりの状況、見える情景をみえているままに内在的視点から全体を描写」(藤井 (2020) : 73) している一方で、(5b) は Many rich families という主体が表示され、その主体による行為 (build) を描く表現となっている。このことから、日本語は「自己を客体化することなしに「私」を表現できる言語であり、同時に、自己が体験し、感じ取った世界を内在的視点により話の世界を形成し、話し手のいる場面がそのまま話の場面になりやすい」(藤井 (2020) : 71) という。このことから、日本語では話し手は「場」に臨場した状況で、その「場」の内側から事態を表現することができるという特徴を持つ言語であるといえる。

藤井 (2020) はさらに、「場」的な志向性をもつ日本語には強い述語性がみられると述べている。例えば、(4)のように日本語では、言表主体を明示しないため、その述語の部分に情報が多分に盛り込まれることになるという。また、「場」を意識する日本語は以下のように、存在を表す構文が優位であるが、その意識のない英語は所有表現が優位であるとしている。

- (6) a. (私には) 姉が 2 人います。  
b. I have two sisters. (藤井 (2020) : 86)

池上 (2006) 等は日本語は存在を表す構文を中心とする「BE 言語」である一方で、英語は所有を表す構文を中心とする「HAVE 言語」として、(6)の違いを分析しているが、藤井 (2020) は、「日本語は主体が存在する場所を全体として捉え、主体が所有するものであってもそこに存在するものやこととして描写する」(藤井 (2020) : 86) と述べ、「場」の志向性の違いから両者の違いを捉え直している。以下の表現にも同様の違いがあるという。

- (7) a. お腹が痛い。  
b. I have a stomachache. (藤井 (2020) : 87)

(7a) では、「お腹が痛い」という状態が発生する場所の存在が意識され、その場所は明示されていない主体である。その一方で (7b) の英語では、言表主体が明示され、さらにその主体が状態を所有するという表現となっている。日本語では明示されていない言表主体の「場」に存在する事態が述語のみで情報として十分に伝わることから、日本語の述語性の高さは、「場」の意識の強さから説明されると藤井は分析している。

藤井 (2020) はこのような「場」の志向性をもつ日本語を西田哲学の「場」と「純粹経験」の 2 つの概念から以下のようにまとめている。

- (8)日本語が、自己と他者、物と物、意識とその対象など、そこに存するすべてのものごとを包摂し、映し出す「場所」への強い指向性を持つ言語であり、「場所」においては主客未分であり、「場所」を中心に内在的視点から表現し、場所全体の状況を描写する傾向にある言語である。(藤井(2020):95)

このように、日本語は「場」への強い指向性を持ち、発話主体が内包された場の内側から、言語表現することを好み、一方、英語は「場」の内部からではなく、「場」を俯瞰した位置から視点を取り、発話主体が客体化する言語表現を好むことが明らかとされた。本稿では、日本アニメの作品とその英語字幕を題材にして、(8)の日本語の「場」を志向する特徴が日本語のセリフに表れているかどうか、また、それにどのような英語の字幕<sup>1</sup>が付されて、主体を客体化した俯瞰的な視点から描写する英語字幕となっているのかを検証しながら、「場の語用論」の妥当性を次節で検討する。

### 3. 事例検証

本節では、前節で述べた先行研究を踏まえて、実際の言語の使用場面である日本のアニメ作品を題材にして、その日本語セリフに「場」の意識がどのように根付いているのか、そして、それが英語に訳された場合、どのように表現されているのかに着目して、日本語の「場」の指向性を検証する。

まず、『となりのトトロ』で、サツキとメイが父にトトロと会ったことを報告する場面をみる。

- (9)
- |  |   |
|--|---|
| 父：やあ、すまん、すまん。電車が遅れてね。バスに間に合わなかったんだ。心配したかい？ | How nice of <u>you</u> to meet <u>me</u> . I'm sorry, but the train was late. That's why <u>I</u> missed the first bus. <u>You</u> weren't worried, were <u>you</u> ? |
| サツキ:出たの、お父さん、出た、出た。                        | <u>I</u> saw <u>him</u> . <u>He</u> was right beside me!  |
| メイ:ねこ、ねこのバス。                               | <u>Me</u> too.  |
| サツキ:すっごく大きいの。                              | Oh, and gigantic arms.  |
| メイ:こ～んな目してるの。                              | Great big eyeballs, too.  |
| サツキ&メイ:こわ～い                                | <u>It</u> was scary. <u>I</u> was scared.   |
| サツキ&メイ:会っちゃった、トトロに会っちゃった。                  | <u>We</u> saw Totoro! <u>We</u> saw Totoro!   |

<sup>1</sup> 深谷(2010)は、『となりのトトロ』の英語字幕と吹替の英語表現に着目し、「字幕よりも吹替の方が語数は多い。字幕は日本語に近いが、吹替は原文にない英語表現の追加、解釈を積極的に行なっている。その結果、あいづち表現、談話標識が増え、会話らしさが高められている。」(深谷(2010):14)と述べている。このことから、英語字幕は字数制限はあるものの、英語字幕には吹替セリフ以上に表現上の英語らしさが表れていると考えられることから、本論では英語字幕を分析の対象とする。

日本語セリフでは全く使われていない自称詞、他称詞、代名詞が英語の字幕では復元されている。このことから、藤井（2022）の言表主体の明示化の日英語の差が明確に観察される。サツキの「出たの、お父さん、出た、出た」というセリフは、言表主体である「私」も知覚対象である「トトロ」も全く表現されていない。つまり、述語のみの文で十分な情報が提供され、日本語の述語性の高さの反映であると分析できる。一方、英語では、知覚主体が he で表されている。また、「出た」というサツキのセリフはサツキの体験による驚きと嬉しさを直接表現したサツキの内的なものである。しかし英語字幕では、言表主体、知覚主体を表現しただけではなく、He was right beside me. 「彼は私のすぐ横にいた。」と出来事に関わる両者の位置関係を明確に表現している。この英語字幕は英語の外的視点から両者の位置関係を表現したものであり、英語の外的視点をとる志向性を反映していると考えられる。さらに、サツキとメイの「こわ〜い」というセリフとその英語字幕をみると、日本語セリフでは、ふたりの心的状態をそのまま表出したものであると思われる一方で、その英語字幕は、トトロが現れた状況を it で表した It was scary. とサツキまたはメイのどちらかの心的表現である I was scared. とふたつの英語字幕が付されている。この英語訳も、場面を俯瞰的に捉え、外的視点から状況を捉えているからこそその表現であるといえる。この例から日本語の「場」の志向性が確認され、それが英語が好む主体を客体化し、外的視点から俯瞰的に表現することを志向する英語の特徴を反映した翻訳に置き替わっていることがみてとれる。

次に(10)は、『鬼滅の刃―無限列車編―』の煉獄杏寿郎が竈門炭治郎に家族への伝言として伝えた際のセリフと英語字幕であるが、ここにも、上記と同様の日本語の主体の非明示化、英語の客体化がみられる。

- |   |  |
|---|--|
| (10) シャベれるうちに喋ってしまうから聞いてくれ。弟のセンジュローには自分のこころのまま、正しいと思う道を進むように伝えてほしい。父には身体を大切にしたいと・・・ | I'm going to tell <u>you</u> all <u>I</u> can while <u>I</u> can still talk, so listen, will <u>you</u> ? Tell <u>my</u> little brother <i>Senjuro</i> to follow <u>his</u> heart and to walk down the path that <u>he</u> feels is right. Tell <u>my</u> father that I want <u>him</u> to take care of <u>himself</u> . |
|---|--|

この例にも、日本語では明示されていない言表主体が英語では明示されている。それだけではなく、日本語のセリフにはない he, his, him, himself といった三人称代名詞が多数英訳されている。この煉獄杏寿郎の独白は、(死が迫っている)自身の思いをこの場面にいる者たちに共鳴するように語られたものである。それが英語字幕では、この場を俯瞰的に捉え、主体である煉獄杏寿郎を客体化して描写していることから、このように多くの代名詞を用いる必要があると分析できる。このことから、このシーンにも言表主体の明示化の違いだけではなく、日本語と英語の「場」の志向性の違いが見てとれる。

次に、以下の『となりのトトロ』の日本語セリフと英語字幕をみる。(11)は、家族が新居を初めて訪れるシーンで、新居の門からその建物まで歩いていく道程で、登場人物のサツキが目に映るものを次々と述べている。このセリフの英語字幕は、サツキのセリフとは大きく異なるものとなっている。

- |                             |   |
|-----------------------------|---|
| (11) サツキ：メイ、 <u>橋</u> があるよ。 | Hey, Mai, come over here a minute.  |
| メ イ：橋？                      | Wow!  |
| サツキ： <u>魚</u> 、ほら、また光った。    | What are those little things swimming around? <u>I don't know. Goldfish maybe or something?</u> |
| (中略)                        |   |
| サツキ： <u>木のトンネル</u> 。        | Come on. Mai, run!  |
| サツキ：あのうち？                   | Can we? You be careful, OK?   |
| はやく！                        | Oh sure.  |
| メ イ：へへへ・・・                  | <u>What a lot of neat old junk. Do you think it's haunted? Oh maybe it is.</u>                  |
| (セリフなし)                     |   |
| サツキ：うわぁ、ボロ。                 | Oh, boy.  |
| メ イ：ボロ。                     |   |
| サツキ： <u>おばけ屋敷</u> みたい。      | I bet I can beat you around the house.  |
| メ イ：おばけ？                    | Wait!   |

『となりのトトロ』の日本語セリフと英語字幕を分析する山田(2005)はこのセリフの日英語の違いについて、サツキの「イメージ性の強い台詞は、英語版では機能性の強いものへと入れ替わっている(山田(2005):277)」と指摘しているが、機能性が高いとは何を意味しているのか明らかにしていない。このシーンでは、「橋」「魚」「木のトンネル」「あのうち」とサツキが目にしたものを名詞を使って描写している。一方、これらのセリフの英語字幕は、日本語セリフと大きく異なり、サツキが目にした4つのものに対応する英単語が Goldfish を除くとほぼ見られない。これらのサツキのセリフは「場」に溶け込んだ視覚的な表現である。一方、英語の字幕では、このシーンのキーワードとなる上述の4つの単語が明確に訳されていないだけでなく、日本語セリフのサツキやメイの内在的視点が第三者的な視点から客体化され、説明的に表現されている。例えば、サツキが川に泳ぐ魚を見ている場面では、英語字幕として What are those little things swimming around? I don't know. Goldfish maybe or something? とサツキの状況を第三者的な視点から俯瞰的に説明している。加えて、

サツキやメイのセリフがないにも関わらず、英語の字幕が出てくる場面でも同様に、Do you think it's haunted? Oh maybe it is. と自問自答の形で、神的視点からその状況を見ている第三者の語りとして翻訳されている。つまり、この場面では、主体であるサツキの視覚体験をサツキ自身がそのまま語っているシーンであるが、その英語字幕は場面をサツキの目から描くのではなく、サツキが客体化し、第三者の俯瞰的に観察する視点としての英語字幕が附されているといえる。サツキの視覚体験＝「場」的な語り、「場」から切り離された視点からの表現として英訳されていることがわかる。

最後に、疋田（2017）が観察している『劇場版ポケットモンスター：ミュウの逆襲』の冒頭シーンを考察する。

- (12) A：幻のポケモン。ミュウが神秘的な力  
をもち、大洪水を引き起こしたと  
か荒地に作物を実らせ人々に分け  
与えたとか、様々な伝説が語り継  
がれています。
- B：天使か悪魔か、気まぐれなだけか。
- A：永遠の命があるとも言われていま  
す。
- B：しかし絶滅したんだらう？
- A：ところがミュウを見たという話は  
最近になっても報告されています。
- B：確認はされていない。まともな写  
真1枚取られていない。
- A：ミュウです。そして、これが今回  
発見された化石です。ミュウの体  
の一部ではないかと。
- B：早速研究所に持ち帰ろう。もし、  
本当にミュウの化石だとすれば。  
最強のポケモンが作れるはずだ。
- August 6th. Today my colleagues  
will research the site where ancient  
civilization may have created a shrine  
to *Mew*, the most powerful *Pokemon*  
to have ever existed now believed to  
be extinct. Giovanni's financing the  
expedition, when he learned that  
my works in the field of cloning he  
agreed to find my research... but  
only if I would try to create for him  
an enchased living replica of *Mew*.  
I had to agree. All he wants is to  
control the most powerful *Pokemon*  
the world's ever known. I of course  
want something more, much more.  
*Mew*. Our team is bringing back what  
we believed to be a Mew Fossil. I pray  
it's authentic. If so, I may finally have  
the DNA I need to create the *Pokemon*  
powerful enough to survive the cloning  
process. Perhaps then I can unlock the  
secret to restoring life itself.

(疋田 (2017) : 18)

この例では、物語の始まりとしてこの物語のキーとなる「ミュウ」を導入するために、遺跡を探索しながらその説明をふたりの研究者の語りで描いた場面である。つまり、

「ミュー」の発見の「場」の中に臨場したふたりの研究者の主客合体した場面からストーリーの背景を導入しているのである。このふたりの語りは、英語字幕では一人称Iが使われてひとりの研究者が、自分の同僚である研究者（my colleagues）の様子を俯瞰的な視点から語り、ストーリーの背景を説明するものになっている。その証拠に、冒頭で日本語にはない August 6th とこの場面の出来事がいつのものなのかという情報が付け加えられている。さらに、Giovanni という出資家と思われる人物や DNA、cloning といった日本語セリフにない人やものが英語字幕に登場し、物語の背景を日本語よりもさらに詳細に説明している。このような字幕はストーリー全体を知っている第三者的存在を前提に語られたものであると思われる。

まとめると、このシーンでは、「場」に臨場して語る日本語は、ふたりの研究者が目にしたものを語りあうことで、状況を説明しているのであるが、英語では、ふたりの研究者の状況を俯瞰的に述べることに加えて、彼らの研究の背景まで詳細に描写する外的な視点による 1 人称語りとして訳されている。このことから、日本語の「場」の指向性と英語の「外的視点」の違いがこのシーンからも観察される。

本節では、3 つの日本のアニメ作品の 4 つのシーンの日本語セリフとその英語字幕を検証し、(8)の日本語の「場」を意識し、その内部から話者が語るスタイルの言語表現がどのように表れ、それが日本語と異なり、「場」を俯瞰的に見下すことを好む英語にどのように翻訳されているのか検証した。その結果、日本語セリフに「場」の指向性が確認され、その英語字幕には英語が好む描写手法が取られていることが明らかになった。

#### 4. 結語と今後の課題

本稿では、「場」の言語学といわれる言語研究の枠組みについて概観し、3 つの日本のアニメ作品中の 4 つのシーンの日本語セリフとそれに付された英語字幕をとりあげ、「場」の志向性を持つとされる日本語が日本のアニメのセリフにどのように表れ、また、「外在的視点」から事態を描写することを好む英語の特徴がアニメ作品の英語字幕にどのように反映されているのか検討した。本稿で取り上げた 4 つのシーンの日本語セリフはどれも言表主体が「場」に臨場した視点から語る手法が取られていることが観察され、藤井（2020）が日本語の特徴としてまとめた(8)の特徴が当てはまることが明らかになった。その一方で、それぞれのシーンに付された英語字幕は「場」の内部から語るスタイルがとられず、「場」を俯瞰した視点から第三者的に語られ、また、言表主体を客体として分離して言語化する傾向がみられた。

本稿で取り上げた日本アニメのセリフを題材とした研究は、その各シーンが実際の会話場面であるため、井出（2020）等が中心に議論する語用論に依拠した研究にもつながると思われる。今後もこのようなアニメのシーンを題材としてさらに広い言語事実から「場」の言語学の妥当性を検討し、日英語それぞれの言語の志向性の研究を深めていくことが今後の課題となる。

## 参考文献

- 深谷輝彦 (2010) 「字幕と吹替の訳し分け：『となりのトトロ』の英訳」『言語と表現—研究論集—』7号 13-26. 椛山女学園大学
- 藤井洋子 (2020) 「日本語の「場」志向性と述語主義を考える—英語との比較から—」井出祥子、藤井洋子 (編) 『場とことばの諸相』62-103. ひつじ書房
- 疋田初季 (2017) 『日本のアニメーション映画における日英表現の違い：『劇場版ポケットモンスター ミュウツーの逆襲』の分析』特別研究 常葉大学外国語学部英米語学科
- 井出祥子 (2020) 「場の語用論—西欧モデルを補完するパラダイム—」井出祥子、藤井洋子 (編) 『場とことばの諸相』1-35. ひつじ書房
- 池上嘉彦 (1981) 『「する」と「なる」の言語学—言語と文化のタイポロジーへの試論』大修館書店
- 池上嘉彦 (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚<ことばの意味>のしくみ』日本放送出版協会
- 池上嘉彦 (2011) 「日本語と主観性・主体性」澤田治美 (編) 『ひつじ意味論講座第5巻 主観性と主体性』49-67. ひつじ書房
- Langacker, W. Ronald. (1991) *Foundations of Cognitive Grammar, vol. 1: Theoretical Prerequisite*. Stanford, CAL: Stanford University Press.
- 影山太郎 (2021) 『点と線の言語学：言語類型から見た日本語の本質』ひつじ書房
- 牧野成一 (1996) 『ウチとソトの言語文化学—文法を文化で切る』アルク
- 岡智之 (2013) 『場所の言語学』ひつじ書房
- 尾野治彦 (2018) 『「視点」の違いから見る日本語の表現と文化の比較』開拓社
- 山田健太郎 (2005) 「英語版アニメ作品に見る翻訳の問題2：『となりのトトロ』の場合」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第6号 273-284. 長崎シーボルト大学

## 映像作品

- 『となりのトトロ』(DVD：デジタルリマスター版) 宮崎駿 2014年 ウォルト・ディズニー・ジャパン
- 『劇場版 鬼滅の刃—無限列車編—』(DVD) 吾峠呼世晴 2021年 アニプレックス
- 『劇場版 ポケットモンスター：ミュウツーの逆襲』(DVD) 田尻 智 2000年 KADOKAWA メディアファクトリー

(2023年1月16日受理)

